



今月の江戸しぐさ「会釈のまなざし」 1月

「会釈」は仏教用語の和会通釈（わえつうしゃく）という異なるものとの間の理解を図るという意味が、他人を無視することなく尊重するしぐさの概念に変化したと考えられます。

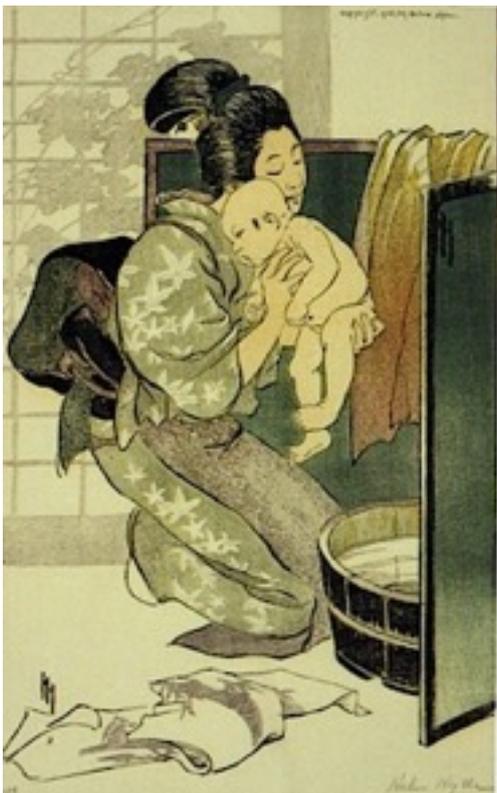
朝晩、初対面の挨拶は古今東西共通ですが、江戸の町ではみずしらずの人間にまですれちがいざまに会釈をすることが当たり前だったことは現代の感覚ではちょっと驚きです。（大通りでは別です）

すれちがう時に会釈をすることは社会生活を円満にすることに役立っていたと思われませんが、異なる側面もありました。

江戸の町は人口密度が高く、多くの外からの人もまじっていました。そのため会釈をすることによって「私はあなたを認識しました」というシグナルを送ることによって盗人などに抑止効果となっていたようです。

「挨拶」と「会釈のまなざし」は江戸しぐさの基本となるものですが。当院ではそれがよくできていて嬉しいことです。他人を尊重することは人間社会ではとても大切なことで、挨拶や会釈などの人を尊重する気持ちのない人は自分も尊重されないことをその人は知りません。

すれ違う患者さんや家族の人にも目を合わさなくよいですから、軽く会釈をする人を尊重する病院でありたいものです。



入浴

※江戸思草は、江戸時代の町民が良いとされること、悪いとされることなどの生活の規範としていたものです。

判断の基準は粋かどうかだったようです。

粋の概念は武士の武士道に対抗するものだったという説があります。他の国にない、一般庶民の高度な精神性が、当時日本に来た外国人に驚きをあたえていたことが多数記録されています。

ヘレン・ハイド

Helen Hyde(1868~1919)

日本を愛したアメリカ人版画家。
江戸の風情が強く残っていた明治期に10年以上滞在し、女性の視点から愛らしい子供の作品をたくさん残してくれましたが、当時の外国の観察者の多くが西洋諸国の子育てと根本的に異なっていることに驚いていました。

